

# 文部科学大臣賞

『たくさんの人達への恩返し』

千葉県我孫子市立我孫子第三小学校 六年 青島 可依

自分は給食に恩がある。食わず嫌いを直してもらったことだ。米・みそ汁・肉・魚以外食べれなかったが、給食に出会い野菜のおいしさを教えてもらった。そんな給食に恩返しがしたい。それが給食における食品ロス削減に取り組もうと思ったきっかけだ。

まず私がしたのはクラスの人への呼びかけだ。食品ロスを減らさなかなど訴えたが、結果は賛否両論だった。ほんのわずかの人は賛成したが、多くの人は給食を残してばかりだった。私は先生と賛成者と学校の食品ロスの調査に取り組み、クラスの人に食品ロスを伝えることにした。

「では何から始めるべきなのだろうか。」担任の先生に相談したところ、栄養士の先生に手紙を書くことを提案して頂いた。

「なるほど、それだ!。」と思った私は給食に恩返しをさせたいことや給食が大好きなことなど自分の思いを手紙として書いて、栄養士の先生に渡した。

そして、その日から一週間後の放課後に栄養士の先生に話を聞きに行くことになった。まずわかったことは、一番残りやすい給食は米や魚や野菜などで、残りにくい給食は肉や卵やデザートなどということ。次に毎日給食は全校で三十キロも食品ロスになっていてそれが早朝から一生懸命、給食を作っている調理員さんを変態悲しませていること。

もちろんその他にも色々なことを教えて頂いたのでそのことをまとめ、皆で協力しパワーポイントでスライドを作った。さらには、先生が授業として、時間をくださったので栄養士の先生と自分達クラス全体で食品ロス問題について考え、どうすれば無理せず食品ロスを減らせるかを話し合うことができた。

そして、その話し合いをもとに給食の準備を速くして、食べる時間を増やしたり、各自が食べられるだけ給食の量を調節したりと、クラスの給食のルールを決め実行した。その甲斐あって、学年で食品ロスを五キロ以上減らすことができた。

それまでのことを母親に話すと、  
「給食は色々な食材を使って栄養満点の食事を提供してくれて本当にありがたい。しかも市が補助してくれて一食二百円もしないんだ。夏休みになると、そのありがたいが身に染みる。」

と言っていた。給食はどうやら子供だけでなく親にとってもありがたいものらしいということを知って本当に給食は学校に欠かせないものなのだなと思った。

小学六年生になった今、私は児童会でも学校の食品ロスを削減する活動をやろうと思っている。食缶から残った給食が減れば、調理員の人達や農家、酪農家、漁師などたくさんの人達に本当の恩返しができるはずだ。